

プリンス徳川の愛した  
邸宅と庭園

# 戸定邸



晴耕雨読 | 建築探訪エッセイ

人がつくる家・家がつくるドラマ vol.31

甲州千秋/文  
text : Chiaki Kosyu  
久保田陽一/撮影  
photograph : Youichi Kubota

- 場所 松戸市松戸714-1
- 建築 明治17年4月完成 庭園は明治23年完成
- 区分 国指定重要文化財(戸定邸)  
国指定名勝(旧徳川昭武庭園)

遠くには富士山の秀麗な姿、そして眼下には江戸川の流れを望む風光明媚な小高い丘の上に「戸定邸」が完成したのは明治17(1884)年のこと。幻の将軍とも呼ばれる徳川昭武の美学が反映された気品漂う「戸定邸」を訪ね、幕末から明治へと、日本が近代化に向けて大きく舵を切った歴史の転換期に思いを馳せる。

## 昭武の高い資質を見抜いたのは慶喜であった

徳川昭武は嘉永6(1853)年に水戸藩9代藩主・徳川斉昭の18男として誕生した。江戸幕府最後の将軍を務めた徳川慶喜は16歳年上の異母兄にあたる。年齢に開きがあることから、幼い頃から仲が良かったというような関係ではないが、昭武が10歳の時に京都へと上京し、慶喜とともに京都御所警備を行うなど、公的なつながりを持つ中で、慶喜は昭武を高く評価するようになっていった。そして慶応2(1866)年、将軍家の家督を継いだ慶喜は昭武を水戸家から将軍家に迎え入れ、後



▲パリでの徳川昭武の衣冠姿。

昭武には、渋沢栄一、向山一履、山高信離、杉浦譲ら20名ほどが随行した。日本は長きに渡る鎖国により、オランダ・清(中国)など限られた国以外の外国との交際を拒絶し続けてきたため、パリは昭武にとって未知なる環境だった。しかし、好奇心があり、新しいことにチャレンジすることを恐れない昭武は、初めての体験の中でベストを尽くした。また、使節団一行も西欧から多くを学び、後に近代日本の構築にその力を大いに発揮することとなる。

## 外交の最前線で活躍するも時代は変革の時を迎える

パリに到着した昭武は、将軍名代としてフランス皇帝ナポレオン3世に国書を奉呈。昭武がナポレオン3世に会いに行く際には、数千人の見物人が出たという。さらに万博の主要行事終了後には、ヨーロッパ各国を歴訪し、元首らを表敬訪問した。彼は国際交流の最前線に立ち、日本の歴史上類を見ない外交を成し遂げたのである。イギリスの新聞は、有力な次期将軍候補「プリンス・トクガワ」として報じ、各国の新聞にも大きく取り上げられた。

万博終了後、昭武は当初からの予定通りフランスで留学生生活に入った。フランス政府から教育責任者として派遣された軍人・ヴィレット中佐の統括のもと、語学・歴史・馬術をはじめとするさまざまなヨーロッパ貴族階級の文化を学び、教養を深めていった。しかしその頃、日本では明治維新という大変革が進んでいた。慶喜からは留学を続けるようにとの手紙が届いたが、幕府復活を支持する勢力の旗頭と



▲表座敷客間から庭園を望む 最上級の杉材を生かした造りは、落ち着いた雰囲気を感じ、簡潔だからこそ静かな気品に満ちている。庭園との一体感が心地良い。

## 将軍・慶喜の名代としてパリ万国博覧会へ

陰りを見せ始めていた江戸幕府の再生を図るため、将軍・慶喜はフランスとの連携を強めていた。その中で、パリ万国博覧会へ参加するため、慶応3(1867)年に昭武を名代として派遣する。この時、昭武は13歳であった。

パリ万博は日本が初めて公式に参加した万博であり、宮廷外交におけるデビューとして大きな意味を持つものだった。そこにまだ少年だった昭武を派遣したのは、慶喜が昭武を次期将軍候補と考え、パリで多くを学んで欲しいと期待していたからだ。また、兄弟の中でもとりわけ昭武との相性が良く、感性も似ていたであろうことも、昭武が大人になってから、2人で趣味の写真を楽しんだ様子からうかがえる。



▲茅葺門 華美でない落ち着いた風情の門構え。